

# パリ通信・第155号

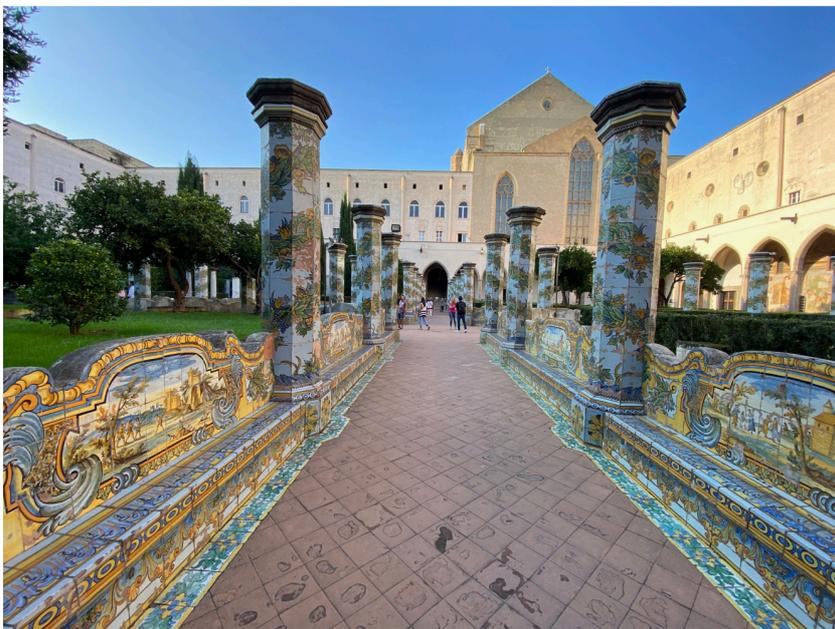
## ナポリのカラヴァッジョ

11月1日「万聖節」のバカンスを利用して南イタリア・ナポリに行った。ルーアンの「キリストの鞭打ち」を見て、ナポリ・カポデイモンテ美術館所蔵「キリストの鞭打ち」はぜひ見たいと思った。

「ナポリを見ずして死ぬことなかれ」とはゲーテの言葉だが、ヴェスヴィオ山を望むナポリ湾は風光明媚な地で複数の異なる文化を生きてきた都である。



1130年ノルマン人ルッジェーロ2世がパレルモを首都に「シチリア王国」を設立し、ナポリを中心とする南イタリアも制圧し「両シチリア王国」へと発展する。1282年「シチリアの晩鐘」(フランス・アンジュー家シャルル1世の重圧な支配に反発したパレルモ市民が復活祭月曜日の晩鐘時にフランス人排斥蜂起を起こす)で、アンジュー家は「ナポリ王国」を治め、スペインのアラゴン王がシチリア王となる。ギリシア、ローマ時代から中世はフランス、スペインが統治する歴史的背景の上に栄えたナポリである。



1310年アンジュー家ロベール王と王妃マヨルカのサンチアが建てた「聖キアラ修道院マヨルカの回廊」には、当時の生活風景を描いた黄色と青が美しいマヨルカ陶器の柱が並び、抜ける青空の下でオレンジの木々を囲み、静かに時を過ごせる場所である。

1606年5月ローマで殺人を犯したカラヴァッジョが最初に逃れたのが当時スペイン統治下にあったナポリ。画家としての名声はローマで頂点を迎え、逃亡者であるにも関わらずナポリでも多くの注文を受けた。安全のため(盗難の経験あり)1972年からカポデイモンテ美術館に保管されている「キリストの鞭打ち」はナポリのサン・ドメニコ・マッジョーレ教会内礼拝堂を飾るための注文で等身大のキリストを中央に配した286x213cmの大きな作品である。

残された資料によると1607年5月頃から制作に取り掛かり、描き上げたのは2度目のナポリ滞在1610年だと考えられている。中央の柱に縛られて首を垂れたキリストの肉体は光を受けて闇から浮かび上がり、鞭を打つ三人から遠い静かなところにいるようである。

(闇は光に勝たなかった。編者)

この「キリストの鞭打つ」と同時並行してナポリで描いたのが「七つの慈悲の行い」(1607年)だ。1602年七人のナポリ有力者の出資で「ピオ・モンテ・デッラ・ミゼリコルディア教会」建立が始まり、その中の一人ジョヴァン・バッティスタ・マンソが祭壇に飾る絵をカラヴァッジョに注文する。カラヴァッジョ作品中で最も高額の値段で発注された390x260cmの傑作である。



「七つの慈悲の行為」とは①飢えた人に食べるものを与える。②のどが渴いた人に飲むものを与える。③裸の人に着るものを与える。④牢獄の人を訪問する。⑤病む人を看病する。⑥巡礼者を泊める。⑦死者を葬ることである。

新約聖書マタイによる福音書25章35～36に書かれた六つの慈悲に死者を埋葬することを合わせた七つの慈悲で、マルタ島を目指していたカラヴァッジョに七枚を描く時間はなかっただろう。

一枚の絵に七つを詰め込んだ。暗いナポリの路地を舞台にナポリ庶民をモデルに七つの行為が描かれている。右端の若い娘は牢獄で餓死する刑を受けた父に母乳を与える「ローマの慈悲(娘ペローと父キモン)」である。松明を持っているのは聖職者で墓掘り人と足だけ見えている死者を葬ろうとしている。高価な服を着た男は自分のマントを裸の男に着せようとしている。ホタ

テ貝の付いた帽子は巡礼者で向かい合っている男は指で泊まる宿を示している。二人の後ろにはろばの顎の骨の形をした細長い容器から水を飲む男(旧約聖書の士師記、古代イスラエルのサムソンを暗示)の姿がある。そして「慈悲の聖母と幼子キリスト」がナポリの密

接する狭い家々の窓から路地を覗き込むかのように彼らを見守っている。二人の天使は絡み合って、止むことなく展開される人々の慈悲の行為を監督しているようである。

カラヴァッジョは時代と場所を超えた神の教えや「ローマの慈愛」を引用し、人として行うべき慈愛を描いている。二度と戻ることが出来なかったローマを追放されたカラヴァッジョにとって、飢えや渇き、泊まる宿、牢獄、死さえも決して他人事ではない自らの現実として生きていたに違いない。この一枚にはナポリのカラヴァッジョの思いが凝縮されているのではないだろうか。カラヴァッジョの新しさは明暗とリアリズムのテクニックを超えて、個人として、画家として、世界を捉え直す新しい道を開いたことだろうと思った。

2024年10月 古賀順子記

古賀さんから頂いたメール通信です。興味深いものが煮詰まっています。

今回ナポリに行って一番感動したのはナポリの人々が自分たちの文化を大切に守っていることでした。「アンジェロ」(天使)と呼ばれる地元ボランティアの方々が旅行者の道案内をしてくれます。音楽、美術、歴史からカフェまでナポリの観光をサポートすることでナポリをより良く知ってもらう市民活動です。

ナポリの守護聖人は聖ジェンナロです。4世紀初頭ディオクレティアヌス帝統治下に殉教し、斬首された時の血液を小さな容器二つに保存したそうです。血液は固まりましたが、1631年ヴェスヴィオ山が再び火山活動に入った時、固まっていた血液が液体となりマグマ噴火が治りナポリを護る奇跡が起こったそうです(アンジェロのお話)。

今もナポリの人にとって聖ジェンナロは身近な存在で、ナポリ大聖堂に接する聖ジェンナロ礼拝堂には素晴らしい宝物が納められ崇められています。

私が一週間泊まっていたアパルトマンの隣には小さな教会があって、夕方18時の鐘がなると近くの年配のマダムたちが7~8人マリア様に捧げるロザリオの祈りを謳っておられました。邪魔にならないように終わるまで待っていようと思ったのですが、祈りは一時間以上続き、入るのは翌日にしました。南イタリアの人々はとても敬虔だと分かりました。

その地に来てみなければ感じられないことが如何に多いかを実感しました。

「七つの慈悲の行い」も画像としては知っていましたが、実際に本物の前に立つと息を呑むほど圧倒されました。(詳しい解説に感謝です。编者)

ナポリの人はナポリの方言を話し、ナポリの音楽を愛し、北イタリアは嫌いだそうです。11月なのでアマルフィ海岸ではまだ海水浴をしていました。

明るい太陽と輝く青空のナポリ、また行きたいと思いました。(2024年11月11日)

